等　高　線

後藤　隆徳

朝日岳の老人

だいぶ昔の話（１９７４年のこと）だが、その年の夏、Ｏと私は白馬岳から日本海の親不知（おやしらず）に縦走した。

長いコースだが天候に恵まれ行程は順調に進んでいた。３日目は朝日岳のとある池塘（ちとう）に幕営した。すばらしい所だった。他のテントはひとつもなく、蒼く澄んだ神秘的な池にはお花畑が広がり、無数の高山植物が咲き、天上の楽園を彷彿させた。

それもそのはずである、実はこの一帯は幕営禁止だった。もちろんそれは承知していた。だが、次の幕営指定地まで今日中に着かないし、疲れた体がそうさせた。夕食を済ませアルコールも入りくつろいでいた。もう外は冷たい風が吹き始めた。

その時外で声がした。誰だろう今頃。入口を開けてみると、そこには白髪を伸ばした眼光の鋭い老人が立っていた。「老練」という言葉がピッタリの風貌だった。老人はこの辺一帯の自然保護の監視員をしているといった。そして私達に直ちにここを撤収して、キャンプ指定地に行くよう勧告し丘の向こうに姿を消した。

私は少し酔っていたこともあり、高を括り（たかをくくり）適当に受け答えた。どうせこんな年寄りはすぐ行ってしまうだろう。

私達はまた横になってウトウトした。どのくらい時間がたっただろうか。２０分、３０分、いや４０分だろうか。聞こえる音といえばあいかわらず風の音だけだった・・・。

だが何か気になった。何かヘンだった。私はおもむろに起き、テントを出て丘の向う側をそっと覗いて仰天した。そこには、先ほどの老人が眼をカッと見開き、腕組みをし、風に向かい佇立していたのだ。

私は思わず、アッと声を上げるところだった。老人のその後ろ姿は「君たちがテントを撤収するまで私はここを絶対動かない」と言っていた。

それは愚直で頑固で融通が利かない一徹な姿そのものだった。彼は高齢にもかかわらずあふれる情熱と気高い使命感をもち白馬岳周辺の自然を守っていた。

老人は若い私達に多くは語らなかったが体を張り「何か」を伝えたかったに違いない。今もあの光景はハッキリと脳裏に焼きつく。

連休はその朝日岳を再訪する。可能なら老人にもう一度会いたい。だが、それはもうかなわないだろう。しかし老人の「こころ」は今なお私のなかに鮮烈に生き続ける。

ウラシマソウ

4／9　湯河原・幕山にて

カット　来生　陽子